

## ベイリイ氏「コータン語の

## ラーマ王物語」

榎 一 雄

Bailey, H. W.; The Rama Story in Khotanese.

Journal of American Oriental Society, Vol.

LIV, No. 4, pp. 460-468.

Do.; Rama. Bulletin of the School of Oriental

Studies, Vol. X, Pt. 2, pp. 365-376.

### 1

Rāmāyana が Mahābhārata と共に印度叙事詩の雙璧として、世界の文學史上に燦然たる光彩を放つてゐることは、餘りにも有名である。この詩篇が現行の如き七篇四萬八千頌の體裁を整へたのは、大約紀元二世紀頃と推定せられてゐるが、それは印度の

國內に於ては Kanarese (Jain), Tamil, Telugu, Bengali, Malayalam, Hindi, Kanarese 等各種の方言で譯され、翻案せられ、劇化せられて、今日に至るまでなほ脈々たる生命を維持してゐるばかりでなく、印度文化の及ぶ所、廣く東アジアの各地に傳へられて、その文學や美術に大なる影響を及した。

Valmiki の作と稱せられるこの物語の梗概は次の如くである。

Kosala 地方の Ayodhya 國王 Dasaratha の三妃の夫々 Rāma, Bharata, Lakṣmaṇa の三王子があつて、世嗣は Rāma と定められてゐたが、Bharata の母 Kaikeyi は王が嘗て如何なる願望でも二つまでは聞かすべからうと約束したのを思ひ出して、遂に Bharata を世嗣とし Rāma を十四年間追放することを願ふ。王は已むを得ずこれを許し、Rāma は父の命を奉じて、その妃 Sita と弟 Lakṣmaṇa とを伴ひ、森林中に退つて生活する。Sita は Yajñeha. 王

Janaka の娘で、Rama は數多う求婚者の中から、特にその武力を認められて、與へられたのである。

やがて父王は憂悶の中に死んで、Bharata が立つたが、彼は自分の即位の正しくなすことを悟り、Rama の許に行つて歸國を懇請するが聽かれず、空しく Rama の黄金の靴を懐いて歸り、これを王座に置き、これに仕ゑることあたかも Rama に對する如くする。

つて Rama は森林に捷む魔女 Surpanakha の求婚を拒絶し、之を傷つけたので、その兄 Ravana—即ち Dasagriva (十頭)—を誘つて Sita を奪み去らせる。

Ravana はその部下の一人を黄金の小鹿に變ぜしめ、Rama 兄弟が之を追つてゐる間に、Sita を掠奪する。Sita がつれ去られる時、守備の兀鷹は應戦して殺され、やがて空しく歸つて来た Rama に Ravana が奪つて行つた旨を遺言する。

Rama 兄弟は Sita を求めて猿國に來り、その王

Sugriva に味方してその兄 Valin を敗る。その返禮として Sugriva の顧問 Hanumat は猿軍を督勵して Sita の居所をつかち、Rama 軍は遂に橋を架して Lanka 國に渡り、Ravana を攻める。Ravana の親族群臣は皆戰ふことを奨めたが、獨りその弟 Vibhisana のみは戰ふの不利なことを諫める。

戰の最中 Rama は Ravana の子 Indrajit のために傷けられ死に瀕するが、熊王 Jambavat の注意によりて Hanumat は Kalisa 山から靈草を採り來つて、これを蘇生せしめる。

Rama はやがて Indrajit を倒し、Ravana に向ふが幾度首を切つても後から後から新しう首が出て來て大に惱まられる。遂に Ravana の心臓を突いて之を殺し、Vibhisana を Lanka 國王に封じて歸り、生國 Ayodhya に君臨する。

Sita は始め聖火の中にその身を投じて、己の貞潔を證明するが、國人の猜疑に堪えず一時森林中に身

を潜め、最後に衆人の面前で「我が身の汚れぢる證として、大地よ我が身を呑み給へ」と呪して、大地に呑まれてしまふ。Rama はやがてその國を子に遜つて天上に歸り、Visnu 神に還原する。

## 二

印度の國外に於いて、この物語の最も盛んに行はれてゐるのは、Java, Sumatra, Bali, Siam, Cambodia 等南海の諸地方である。これらの地方では、ラーマヤナはその國民文學の代表として愛誦せられて居り、幾つかの類型的な物語が十九世紀末葉に至るまで相次いで製作せられ、今日なほ劇や影繪に仕組まれて人々に親まれてゐる。就中 Java の古語 Kawi 語で綴られた Ramayana Kakawin やバーナ語で書かれた Hikayat Seri Rama は、最も有名である。特に後者は十九世紀の中頃 P. P. Koorda van Eysinga 氏によつて印行せられ、Valmiki の原作そのものの

バーナ語譯の如く一時考へられたが、A. Dozon 氏によつてその然らざる事が明かにせられ、<sup>(83)</sup>後 W. G. Shellabear 氏によつて異本が発見せられて、學界を賑したことがある。<sup>(84)</sup> Shellabear 氏はその梗概と原作との比較を Journal of Strait Branch of R. A. S. No. 70, 1915 (1917) に發表して居り、宮武正道氏「南洋文學」(京都、昭和十四、九四—一〇四頁)にもこの物語の梗概が紹介せられてゐる。<sup>(85)</sup>

ラーマヤナは常に南海の文學に影響を與へてゐるばかりではなから。Java の Prambanan のカンヅー教寺院の遺跡<sup>(86)</sup>や、Cambodia の Angkor Vat 其他の佛教遺跡<sup>(87)</sup>に残存するこの詩に取材した雄大な石刻が、訪れる人々の眼を聳してゐるのは、何人も知る所であらう。W. Stutterheim 氏の「インドネシアのラーマ物語とその浮彫」(Rama-Legenden und Rama-Reliefs in Indonesien. 2 vols. München, 1925) 及びインドネシアに於ける Rama-Sage とその造形美術

への影響を詳細に研究した力作である。

Cambodia, Siam 方面に就いては、Sutterheim 氏は専ら美術的な影響を略説してゐるのみで、そこに行はれてゐるラーマ物語の内容には觸れてゐないが、先づカムボヂャにこの物語の傳へられたのは相當に古すことであつて、ラオス南境の僻地 Bassak 地方 Veal Kantai の遺跡から発見せられた紀元七世紀と推定せられる梵文碑文には、既に「Trihuvanavara (三界主) 神にラーマーヤナを日毎誦上することを記してゐる<sup>(3)</sup>。されば印度との交通の一層容易なカムボヂャ地方にこの物語の流入したのは、少くともこの碑文より以前であつたに相違なす。E. Aymonier 氏は「カムボヂャにラーマーヤナの輸入せられたのは紀元六一一年で、それはやがて土語 [Khmer 語] に譯出せられた」とし、Fr. Garnier の説を根據なしと斥けてゐるが、(Le Cambodge. III, p. 441) 少くともその輸入の年代に就いては、必ずしも一概に

根據なしとは云へなすであらう。E. Aymonier 氏がその梗概を極めて簡単に紹介してゐる所によると、カムボヂャに現在行はれてゐるラーマーヤナは原作を大いに節略したもので、最後にラーマ王は佛陀の前身であると結ぶ本生譚 (Jataka) に他ならな<sup>(4)</sup>。

シヤム地方に行はれてゐるこの物語の内容に關しては何等知る所がないけれども、安南には十八世紀頃の作と信ぜられる史譚集嶺南摘怪に、夜叉王といふ題でラーマーヤナの Annam version が掲げられてゐる<sup>(5)</sup>。これは妙嚴國の主魔王長明が、その北にある狐孫精國を攻めて王徵姿の妃白淨を奪ひ、徵姿は猿軍を督して之を奪還するが、狐孫精國こそ今のチャム人の祖先であるといふので、徵姿はラーマ王、白淨は Sita 姫、長明は Ravana に當る。この物語の骨子が印度にあることは云ふまでもないが、その國名・人物名の特異な點、更にチャム人の始祖説話の一つになつてゐる點から考へて、漢譯藏經を通じて支那から

輸入せられたものではなく、チャン人の間に古くから言ひ傳へられてゐた話であらうと思はれる。

本來ラーマヤナはラーマ王其他に關する印度古來の英雄譚や英雄頌歌が集大成せられたもので、何等佛教的色彩を帯びてゐないのであるが、佛教徒はやがてこれを Jataka (本生譚) に仕組んで、ラーマ王は即ち釋尊の前身であると説き、布教の具に供した。南傳のパーリ佛典にあるこの種の Jataka は V. Fausbøll, A. Weber, H. Jacobi 其他の人々によつて研究せられてゐるが、北傳の漢譯藏經中にも同様の本生譚の存する事實は夙に學者の注目を惹いてゐた。漢譯藏經中ラーマヤナに關係した記載は決して尠くないが、これを Jataka として比較的詳しく傳へてゐるのは、六度集經及び雜寶藏經であつて、前者は Ed. Huber, Ed. Chavannes<sup>(2)</sup>、南方熊楠氏によつて學界に紹介せられ、後者は S. Lévi, Ed. Chavannes<sup>(3)</sup>、小野玄妙博士<sup>(4)</sup>の注意せられた所である。この中、六

度集經の漢譯は最も古く、紀元三世紀に溯るから、少くともその頃からこの物語の大體の筋だけは支那人の間に知られてゐたのである。

我が國にこの物語が傳へられたのは、言ふまでもなく漢譯藏經を通してであつた。平安の末期、即ち紀元十二世紀の後半、平康頼の著したと稱せられる寶物集<sup>五</sup>には六波羅密經を引用して紹介してゐる。

この話は唐貞元四年(七八八)般若譯の六波羅密經<sup>大八、No. 251</sup>には見えなから、康頼の據つたのは出三藏記四以下、開元錄<sup>二四</sup>・貞元錄<sup>三四</sup>等に著録せられてゐる魏吳失譯のそれであつたらう。寶物集に引用せられた説話は六度集經よりやゝ詳しく、且つ多少の相違がある。

チベット藏經の Kanjur の中に、ラーマヤナ中の説話の取入れられてゐるもの存すること、は、早く F. A. von Schiefner 氏が指摘してゐるが、ラーマヤナの Tibetan Version の存在が明白にせられたの

は、敦煌出土のチベット語文書研究の結果であつて、一九二九年先づ F. W. Thomas 氏によつて、India Office 所藏のものが發表せられ、次いで一九三六年 M. Lalou 女史は Bibliothèque Nationale 所藏の文書中にもこの物語の存する事實を明かにして、世界の學界を驚かせた。Lalou 女史の記す所は頗る簡單で、その文書の内容を十分に知り得ないが、Thomas 氏の發表にかゝるものは Mahābhārata (Vana-Parvan, Chap. 274-290) に取入れられてゐるラーマヤナの筋に従つて居り、しかもその登場人物の名稱や相互關係及び物語中の事件には、他に類例を求め難い特殊な改變が施されてゐて、遽かにその系統を詳かにし難いことが明かにせられてゐる。

先づかやうにして、東アジアに於けるラーマヤナの分布は、南海の諸地方から支那・日本・チベット・支那トルキスタンに及んでゐるのであるが、今度ヘイライイ氏によつて、敦煌出土のコータン語文書

の中にその特殊なヴェルシヨンの存在することが明かにせられたのは、ラーマヤナそのものの研究の上から見ても、又東トルキスタンの文化を考へる上から言つても、甚だ重要な發見である。

三

ヘイライイ氏は新疆省出土の Indo-Iranian 語文書の研究に従事してゐる英國の新進で、その業績の一斑は前に石濱純太郎氏・山本達郎氏が夫々東洋史研究<sup>二卷</sup> 歴史學研究<sup>七卷</sup> 九號に紹介せられたことがある。

所謂トカラ語 A 方言が土語なるべきことを明快に論證した論文は、就中有名である。殊に一昨年（一九三八）には India Office 所藏のコータン語文書三篇を編輯出刊して、學界の渴望の一端を醫されたが (Codices Khotanensis. Monumenta Linguarum Et. Asiae Majoris. Copenhagen, 1938, pp. XIII+183) コータン語本ラーマヤナの發見は、既にこの書の

序文の中に報ぜられてゐる (p. XI)。

さて問題の文書は Bibliothèque Nationale のペリ  
オ文書 (Fonds Pelliot) 2801, 2781, 2783 に當り、夫  
々六八・九四・九五行を存する。これらは何れも同一  
人の手に出でた Cursive Khotanese の鈔本で本来ラ  
ーマ物語の全體を傳へた同一書の一部を成してゐた  
ものである。第一はその首部、第三はその末尾、第二  
はその中部を成すものであるが、第二の前後が缺け  
てゐる。次にミイリイ氏に従つてその内容の大體を  
記してみよう。

(二八〇一)。一人は婆羅門が山中に在つて Mahe  
svara 神を祭りながら、敬虔な修道生活を送つてゐ  
た。十二年目の終りに Mahesvara 神が顯現し、修道  
の功を愛でて cintamani (如意珠) と一匹の女牛と  
を下された。そこで婆羅門は妻を娶つて幸福に喜し  
てゐた。

ところがこの Dasaratha とさふ暴君があつて、

ミイリイ氏「コータン語のラーマ物語」

狩獵に出でこの婆羅門の家で休んだが、その女牛  
を奪つて行つたので、生活の資を失つた婆羅門は息  
子 Parasu Rama ("Rama of the axe") と物乞ひを  
しながら哀れな毎日を送つてゐた。やがて息子も入  
山して十二年の修業を積み、Brahma 神から siddhi  
(成就「力」) を授けられ、Dasaratha を殺して父の  
怨みを報じ、婆羅門の徳を頌して全國の諸王を殺戮  
した。殺された Dasaratha の二十 Rama, Prisman  
(Laksmana) は母の手で十二年間地下に匿され、遂に  
Parasu Rama を殺して閻浮提の王と成つた。

ところが魔王 Dasagriva の第一妃に娘が生れた  
が、占星家がその必ず城市を滅すべきを豫言したの  
で、王は命じて之を大河に流させた。娘「Sita」は一  
人の道(隱者)に拾はれて成長した。(下缺)。

(二七八一)。(前缺) Rama 兄弟は青年となつて  
Sita の居所に赴き、その美にうたれ、之を貰ひうけて  
magic circle の中に置く。この呪圈の中へは何物も

入り込めないのは勿論、その上空を飛ぶことも出来なす。Dasagriva は空中から望見して美女あるを知り、婆羅門に化け、喜捨を乞ふ真似して之に近づき、Sita を掠奪する。Sita を守護してゐた兀鷹が之を防いだが及ばずして殺られ、Sita は Dasagriva の居城 Lankapura に携れ去られる。

Rama 兄弟は Sita を捜しに行く。十二年たつたある日のこと、Sugriva, Nanda の二猿の争つてゐるのを見 Nanda を助けて之を勝たせる。Nanda と Sugriva とは瓜二つなので、Nanda は自分の尻尾に鏡を結びつけて區別し、Rama は Sugriva を射倒す。そして遂に Nanda 一族の猿の助力を得て、Sita が Lankapura に監禁されてゐることをつとめて、石橋を作つて Lankapura に渡り大擧して Sita を奪還しようとする(下缺)。

(二七八三)。(前缺) Dasagriva の二人の大臣は女子に惑つて國を失つた例を引いて、Sita を返却

せよと諫めるが聽かず、Rama の攻撃に應じ、蛇毒を矢に塗つて Rama を射る。Rama は失神する。

Jivaka が之を救ふために呼ばれる。彼は Himavant 山に住してゐる amratta sanjiva が靈験があるとして、Nanda を捜しにやる。この薬草の靈効によつて Rama は蘇生する。そして古星家から Dasagriva の急所はその右の足指であることを聞き、射て遂に之を倒す。Dasagriva は惑ふを乞ひ、終身朝貢することを誓つて許される。

Rama 兄弟は Sita と共に百年間暮したが、臣下は Sita の貞潔を疑つて國政が圓満に行はれぬ。Sita は遂に地中に入つて姿を隠し、Rama は大洋に赴いてその魔神を征服する。

Rama は即ち Buddha Sakyamuni である。Dasagriva は佛陀のもとに來り、Dharma (法) に従つて生ずるやうに教へられる。又、佛陀は Dasagriva の従者を諭して菩提を求めしめる。



今このヴェルシヨンの特異な點を、Valmikiの原作並びにその他のラーマヤナと比較してみよう

第一に物語の發端に見える Parasurama の復讐の語は、原作 Balakānda, LXXIV-LXXV (A. Rousset, Le Rāmāyana de Valmiki. Bibliothèque Orientale. VI-VIII. Paris, 1903) にある語であるが、

梵本では Parasurama は Rama に歸服したことになるつてをり、殊に Rama がその殺戮の手を免れるために地下に潜んだことは他の如何なるヴェルシヨンにも見えなす。又、原作では Parasurama 奮起の原因は父 Janadagni が Arjuna に殺られたためだとしてゐる。

第二に、Sita 姫が魔王 Dasagriva 即ち Ravana の娘に成つてゐるのは原作と異つてゐるが、Jain教徒の手に成るラーマ物語 Pāṇḍacarīya、チムット語本、マレー語本とは同じである。

第三に Sita が不吉として捨てられるのは、チムット

語本、マレー語本と同じである。但しチムット語本では百姓に拾はれ、Rama に獻上せられたことに成つてゐ、マレー語本では Maharisi Kala 王に拾はれ、婿選びをすることになる。

第四に Rama 兄弟が Sita を呪園に置くことは、他の如何なるチムットにも見えなす。

第五に Rama の助けた猿王の名が異つてゐる。梵本では Rama は Sugriva を助けたことに成つてゐるが、ロータム語本では逆で、殊に原作の Sugriva と Hanumat の役目を Nanda 一人が兼ねてゐる。これも獨特である。

第六に Sugriva を討つ時、Nanda は尾に鏡をつけて區別するのは、チムット語本と同じである。その他のチムットには見えなす。

第七に Rama が Dasagriva を討つ時、右の足指が急所であるを知つて、これを射る話は他に類例がなす、チムット語本には

Ravana [Rama] challenges him [Dasagriva] to show as much as a toe; and, when he does so, aims an arrow at where his horse's head should be and cuts it clean away. (by F. W. Thomas, Indian Studies in honor of C. R. Lanman. Cambridge, 1929 p. 206)

と云ふ條があつて、とにかく足指が Ravana の急所であつて、そこを何らかの magical power の藏せられてゐると考へられたらしい痕跡を窺ふことが出来る。

第八に Dasagriva 即ち Ravana が佛陀のもとに來て法を諭される話は、入楞伽經に見える所である。<sup>(註)</sup>

第九にコータン語本が本生譚である點は、類例に乏しくない。但しチベット語本には佛敎的色彩は皆無である。

右のやうな比較によつて、コータン語本がチベット語本に類似する所が多いことが知られるけれども、他方獨特の要素や大乘經典と共通する所もあるので

あるから、直ちに一方が他方に基いたとは斷定し得ない。又、その内容も純然たる印度的のもので、特にコータン地方で製作せられたと想像しなければ解釋出來ない部分もないやうである。恐らくは、中世北印度のある地方に行はれてゐたラーマヤナの或るヴェルシオンが北傳したものと解するのが、今のところ最も妥當な想像ではないかと思ふ。チベット語本・コータン語本の源流に就いては、なほ今後の研究に期待すべきであらう。

それは何れにしても、コータン語本ラーマヤナの發見は、この物語の分布を研究する上に極めて貴重な寄與をなすもので、讀者と共にハイネライ氏の勞を多とするものである。因みに、JAOS 所掲の論文は、一九三九年四月 Baltimore で開かれた米國東洋學會に於ける講演で、テキストの内容の紹介であり、BOS 所載のものはテキストのトランスクリプトレイションである。(十五・五・二一)

標註。

- 1 M. Winternitz, *A History of Indian Literature*. I, Calcutta, 1927, pp. 513, 516
- 2 J. N. Farguhar, *An Outline of the Religious Literature of India*. Lond etc. 1920 p. 367. W. Ruben, *Studien zur Textgeschichte des Rāmāyana*. Stuttgart, 1936 [Bonner Orientalistische Studien, 19] pp. XIII-XV. (A. Baumgartner, *Das Rāmāyana und die Rāma-Literatur der Indier*. Freiburg, 1894) etc. 卷廿一 Tulasi Dās (1532-1623) 244 Hindiversion 達達利達斯 et G. de Tassy, *Histoire de la littérature hindoue et hindoustanie*. III 2nde éd. Paris, 1871 p. 235 ff. A. A. Macdonell, *India's Past*. Oxford, 1927. p. 91 田中於菟羅氏「古印度文學・文學史觀」4 (東洋學報 十冊)。
- 3 Winternitz, op. cit. pp. 477-478
- 4 E. Aymonier, *Le Cambodge*, II, p. 18, III, pp. 439, 556. R. Wheatcroft, *Siam and Cambodia*. Lond 1928. p. 59, P. J. Veth, *Java, Geographisch, Ethnologisch, Historisch*. 2. Druck. Haarlem, 1912. S. 172 ff.
- 5 Auguste Dozon, *Étude sur le roman malay de Sri Rama*. JA, 1846 4. Série VII, pp. 425-471, VIII, pp. 482-509
- 6 W. G. Sheilbear, *An Account of Some of the oldest*

マレーヤ史「ロータス編のローヤ州部」

- Malay MSS. now extant. J. of Strait Branch of R. A. S. No. 31, 1898, pp. 107-151. Do, Introduction to the Hikayat Sri Rama. J. S. B. R. A. S. No. 70, 1917 (1915) pp. 181 ff. 44 史 Bali 史のローヤ州部のローヤ州部 R. Friederich, *An account of the Island of Bali* (Miscellaneous Papers relating to Indo-China. 2nd. Series. II Lond. 1887, pp. 80-81) 邦史(邦) 輪歴
- 7 Java 邦史の邦 J. J. Bezemer, *Deor Nederlandisch Oost-Indië*. Groningen, 1906 S. 394 & Stutterheim 輪歴
- 8 Cambodia 邦史 E. Lunet de Lajongquière, *Inventaire descriptif des monuments du Cambodge*. Paris, 1902 p. 165, E. Aymonier, *Le Cambodge*, I, pp. 226, 320, 367, III, 205-206, 213, 234, 240-241 卷廿一 邦史 邦史 邦史
- (邦史) 邦
- 9 A. Barth, *Inscriptions sanscrite de Cambodge*. (Notices et Extraits des manuscrits de la Bibliothèque Nationale, etc.) Tom. XXVII 1<sup>re</sup> partie, Paris, 1885 pp. 28-31. Aymonier, op. cit. II, 180-181.
- 10 Aymonier, op. cit. I, 44.
- 11 Ed. Huber, *Études indo-chinoise*. BEFEO Vol. 1905, p. 168
- 12 Winternitz, p. 314, 315-316, 509 ff. 516.
- 13 V. Fausbøll, *The Jātaka*. IV. Lond. 1887, pp. 123-130.
- 14 Winternitz, pp. 508-509. H. T. Francis & E. J. Thomas,

卷廿一 邦 邦

- 14 *Jataka Tales*, Cambridge, 1916, pp. 325-331 甲斐寅行氏「ラーマヤナと本生譚」(宗教研究六ノ五、未見)等参照。  
南方龍補氏「古き和漢書に見えたるラーマ物語」考古學雜誌四ノ十二、續南方隨筆二二一二頁。望月信亨氏「佛教大辭典」四九五頁、渡邊海旭氏「佛典中に出づる羅摩衍那及び其の人物」同上を補ひ且大方の諸君に質す(空月全集上、二五二—二六〇頁、學友松松學士の示教による)。同氏「漢譯佛典に於ける長古のラーマヤナ書」(無碍光、十七、四)その英譯 K. Watanabe, *The Oldest Record of the Ramayana in a Chinese Buddhist Writing*, JRAS, 1907, pp. 99-103 等参照。
- 15 Ed. Huber, *Etudes de littérature bouddhique*, I. BEF EO IV, 1904, pp. 698-701. C. Schnyder, Edward Huber. Zürich, 1920, SS. 121-124
- 16 Ed. Chavannes, *Cinq cents contes et apologues*, I. pp. 173-178. IV pp. 114-115.  
續南方隨筆二二—二五頁。
- 17 S. Lévi, *La légende de Rama dans un avadana chinois*. Album Kern (Leyde, 1903), p. 279 (未同) cf. Chavannes, op. cit. III p. 1 note; JA, 1936, p. 26 note) などローマヤナと羅摩衍那の關係を説く L. Renou. *Sylvaïn Lévi et son oeuvre scientifique*, JA, 1936, pp. 30-37 等同。
- 18 Chavannes, op. cit. IV, pp. 197-201.
- 19 小野玄妙氏「佛教之美術及歴史」(東京、大正十一年三月三十一—三八)。もと宗教會(三ノ二、明治四〇—二)に出づ。
- 20 大日本佛教全書本九一—一〇一頁。續南方隨筆一九—二二頁。Schleifer-Raisson, W. R. S. *Tibetan Tales derived from Indian Sources*. New ed. Lond. 1906 pp. 253-256.
- 21 A *Ramāyana Story in Tibetan from Chinese Turkestan*. *Indian Studies in Honor of Charles Rockwell Lanman*. Lond. 1922, pp. 193-212
- 22 M. Lalou, *L'histoire de Rama en tibétain*. JA, 1936, pp. 560-562.
- 23 BSOS, VIII, pp. 885-895 B. 氏の言語的論證には幾多の敬服す。其の論をそのその歴史の方面の議論に至つては承認し難し。個所が少くなく。この對しては何れ論駁する機會があるべき。
- 24 J. Kats, *The Ramayana in Indonesia*. BSOS, IV, pp. 579-585 且 Indonesia の諸地方にはそのその物語の多々簡單に比較したものである。笠松學士の示教による。
- 25 元魏菩提留支譯「入釋迦經」第一(大正 Vol. XVI, pp. 514-519) 唐贊又難陀譯「大乘入釋迦經」第一(大正 Ibid, pp. 587-590) 其の Bunyiu Nanjo; *The Lanka-vatara Sutra*. Kyoto, 1923 pp. 1—21 Daisetz Teitaro Suzuki, *The Lanka-vatara Sutra*, Lond. 1932, pp. 3—21 渡邊海旭氏「佛典中に出づるローマヤナ」(1)等参照。笠松學士の示教による。